

広島・草戸千軒町遺跡

1 所在地 広島県福山市草戸町

2 調査期間 第四〇次調査 一九八八年(昭63)四月～一九八九年三月

3 発掘機関 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

4 調査担当者 代表 松下正司

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の時代 平安時代～江戸時代(中心は主に鎌倉・室町の時代)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
第四〇次調査区は、遺跡包蔵中州の南部に位置し、東西約五〇m、南北五〇mの約二五〇〇m²である。この調査区では、主に室町時代の集落の様相が明らかになった。

鎌倉時代の遺構には、柱穴や溝SD三八六三・L字状のSD四二



第40次調査区位置図

二〇等があるが、全体として閑散としている。

室町時代前半に至って、東西柵群SA四一〇〇・四一三〇・四一四〇・四一七五・四二〇五・四二二〇が造られ、柵による町割りがなされる。そして、井戸SE四一一〇・四一七〇・四一七一・四一七二・四一九五や、数多くの柱穴・土壇があり、集落としての体裁を整えてくる。

室町時代後半には、溝SD三八九一や、それを掘り直した溝SD三八九〇が環濠状に巡り、井戸SE四一二〇や土壇SK四一二五・四一五〇・四一五五・四一八五など環濠の内部に集落が営まれている。木簡は、井戸SE四一一〇から一点(1)、池SG四二一五から二点(2)・(3)出土した。

SE四一一〇は、木組の隅柱横板型の井戸で、東西八m、南北六mの掘形の中に造られており、残存部分は四mと深く、内部から独楽・曲物等の木製品のほか、多量の土師質土器が出土した。SG四二一五は、東西五m、南北八m、深さ〇・六mで、南側に護岸用のしがらみが設けられており、内部に堆積した粘土層から、漆器・下駄・草履状木製品等の各種の木製品が出土した。なお、両者とも室町時代前半のものである。

8 木簡の积文・内容

(1) ・「」□□□□

□□□□

・「」□□□□の□たね

140×(42)×5 111

(2) 「□ま」□^{〔すか〕}く「ま」□「を」

149×27×4 174

(3) □□□□

(94)×(21)×6 197

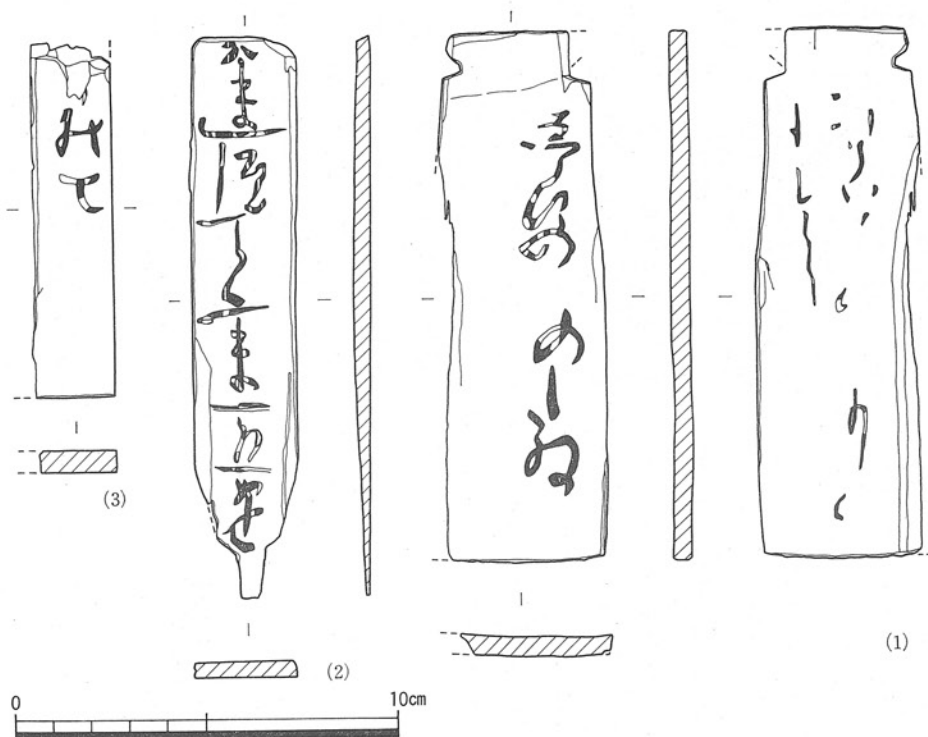
(1)は上端部に切込みを入れたものである。片面については墨の残りが悪く、判読は難しい。もう一面の二字目については様々な読みが考えられるが、「ら」の可能性もある。「あら」とすれば、中世には石成荘に含まれる江良（現福山市駅家町江良―草戸千軒町遺跡の北方約一〇km）が想定され、この地からの物品の付札と考えられる。物品名について四字目が問題となるが、字の部分的欠失を考えると「な」の可能性もあり、「なたね」とも考えられる。

(2)は下端部を細く削り出した形状のものである。一字置きに横線が引かれており、呪符の可能性があり、形状自体も意味を持つものではあるまいか。ただ内容については現段階では明らかにできない。

(3)は断片で、二・三字目は「廿七」「みて」など様々な読みが考えられるが、断定できない。

9 関係文献

下津間康夫・田邊英男「草戸千軒町遺跡第40次調査概要」（『草戸



『一次発掘調査概要』』（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報一九八八、一九九〇年刊行予定）

国宝の本堂を中心に多宝塔
往時八一カ寺を数えた「寺
の町」尾道の中でも、約二
〇件の国指定文化財を保有
する特筆すべき寺院である。
第五八次調査地点は同寺南
西約六〇m、遺跡東端域に
位置する。中腹にある同寺
が偉容を誇ることから、そ
の名を冠して称される浄土
寺山の南裾部に相当する。

- 1 所在地 広島県尾道市久保三丁目
- 2 調査期間 第五八次調査 一九八八年(昭63)一〇月
- 3 発掘機関 尾道文化財協会埋蔵文化財部
- 4 調査担当者 森重彰文
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の時代 鎌倉時代～現代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

広島・尾道遺跡 (G D 0 1 地点)